

主 題：あなたへの祝福を忘れない5—罪の力に対する勝利②—
聖書箇所：ローマ人への手紙 6章18節

私たちクリスチャンというのは勝利者なのだということをこれまで学んできました。世に対する勝利者であると、死に対する勝利者であると。私たちに必要なことは救われて、神が造り変えてくださったものとして、それにふさわしく生きていくことです。たとえ世に対する勝利者だと口で言ったとしても、そのように生きていなければ私たちはどうやって神の栄光を現すのでしょうか？死に対する勝利者だと言っているが、そのように生きていなければ、どうして人々に希望をもたらすことができるのでしょうか。救われたあなたはそれにふさわしく生きていきなさい、そのように私たちの神は言われます。では、どのように生きていけばいいのか、そのことを学び始めたのです。

A. 「神のことばを信じる」

前回私たちがこの場に集まった時に、神のことばを信じるということが一つの秘訣だということを知りました。サタンは、偽り者であり、偽りの父だと聖書が言うように、さまざまな策略をもってあなたの信仰を揺るがせようとします。そのために私たちは彼の策略を知ることが必要だし、またそれにどのように対処すべきなのか、聖書的にどのように応じたらよいかを学ぶことが必要です。サタンは、神のおことばに疑いを抱かせるようにだけではなくて、神のことばに信頼を置かないように、信じないようにと働くことを見てきました。時には自分に都合よくみことばを解釈したり、自分の勝手な考えを信じ込ませ、そしてそのように行動するようにと働くことを見てきました。つまり彼はさまざまな形であなたが神のみこころに従っていかないように、みことばの教えていることに従わないようにと誘惑をするのです。だからみことばはどんな時でも私たちひとりひとりが聖書のおことばにしっかりと正しく立って、さまざまな誘惑に惑わされないようにと教えます。

4. 誘惑への二つの対処方法：

実はヤコブもみことばに従うことがサタンに対する勝利をもたらす鍵だと教えています。ヤコブ4：7には、「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」と記されています。ヤコブは、誘惑に対処する二つの方法を我々に示してくれています。彼は一つ目に「神に従いなさい」、そして二つ目に「悪魔に立ち向かいなさい」と教えています。

(1) 「神に従いなさい」 I ペテロ5：8-9

彼は「神に従いなさい」と言いますが、これは命令、軍隊のことばです。みずから進んで誰かの下に自分を置くことです。ここでは神に従っていくようにと。ヤコブがなぜそのことをここで教えるかという点、先ほども少し触れたように、サタンが私たちのうちに働き、私たちが神のみこころに従わないようにと働きます。ですからヤコブは私たちの責任は神のことばに従うことであると教えるのです。悪魔というのは神の反対者であり、神の敵です。だからもしあなたが神様のみこころに従いたくないとか、神のみこころよりも自分の思いどおりに生きたいと考えるならば必ず問題が生じ、必ずあなたの信仰がぐらつき始めてきます。なぜならそれはあなた自身がサタンに機会を与えるからです。だから私たちは油断してはならないと。

ペテロはIペテロ5：8で「身を慎み、目をさましていなさい。」と言います。まさにそのことが必要なのです。なぜこんなことを言うかということ、今まさに私たちはその戦いの真っ只中にいるからです。この「身を慎み、目をさまして」いるという二つの動詞はどちらも命令です。時制を見た時に、ペテロはこの行動の緊急性と重要性を教えています。今お話ししたように、今まさに私たちは戦いの中にいるからです。信仰にあずかった私たちがは今確かにこの誘惑の中にいるのです。罪との戦いの中にいるのです。ですから彼は「身を慎」んでいなさい、「目をさましていなさい」、そうあることが重要だと言うのです。

ヤコブは、あなたがいろいろな罪の誘惑に勝利していくために必要なことは、みずから進んで神に従うことであると教えています。私たちがイエス様を信じた時を振り返っていただくと、我々はその決心をしてイエス・キリストを信じたのです。私たちは生まれながらに主権者なる神に従って行くという選択をしていたわけではありません。私たちはサタンに従う選択をし、そのように生きてきたのです。福音のメッセージを聞いて、それが間違いであることに気づいて、正しい主である神に従う選択をしたのです。ですからイエス様を信じるということは、この方を私たちの主人として、この方を私の神

としてこの方に従っていくという本来のあるべき姿を我々は選択したということです。ですから私はこれまでと同じように自分の好きなように生きていきます、ただ天国に行きたいからイエス様を信じましょうと、もしそういうことを福音のメッセージとしているのならば、残念ながらそれは聖書の教える救いとは違います。ご利益宗教の話をしているわけではないのです。あなたや私を造られたまことの神がおられるのです。その方に従ってこなかった私たちがその罪を悔い改めて、その方に従っていこうとする。ですから当然私たちはその決心をし、そのような歩みを継続しているはずです。ヤコブが言うように、私たちに必要なことはどんな時でもこの方を疑うことなく、みことばを疑うことなく、従い続けていくことです。この主である方に従いなさい、それがさまざまな誘惑に勝利する秘訣であると。

2) 「サタンに立ち向かいなさい」 マタイ 4 : 10

もう一つ彼が教えてくれるのは、ヤコブ 4 : 7、サタンに立ち向かいなさいということです。このことばはサタンに反抗しなさい、サタンに逆らいなさいということです。恐らくさまざまな誘惑に対して無抵抗うちに敗北を喫してきた人たちがおられるはずです。どうせ私は信仰的に弱いから誘惑に勝利することはできませんと言って、最初から白旗を掲げてきたかもしれない。でもみことばを見ると、ヤコブは私たちにその誘惑に対して立ち向かえ、サタンに対して立ち向かえと言います。

なぜ彼がこんなことを教えたかということ、勝利できるからです。勝利できないことを命じられたらそれは我々にとって重荷です。こうして命じられているのは、私たちはこの悪魔の誘惑に、罪の誘惑に対して勝利することができるからです。イエス様は私たちが経験したことのないような誘惑にお遭いになりました。サタン自身が直接イエス・キリストを誘惑しました。皆さんもご存じのように、イエス・キリストはそのすべての誘惑に勝利されました。そして最後にイエス様がサタンに言ったことばは、「引き下がれ、サタン。」(マタイ 4 : 10) でした。ある人は言うかもしれませんが。イエス様が誘惑に勝利できたのは、イエス様は神だったからだ。いいえ、イエス様は人としてその誘惑に立ち向かったのです。人として彼は勝利されたのです。なぜかということ、イエス様はあなたや私に模範を示してくださった。つまりあなたも私も同じように勝利できるのです。なぜかということ、サタンに勝利した主があなたのうちにおられるからです。

* サタンに勝利した主が我々のうちにはおられる

ヨハネの福音者の中でそのことを主は何度も繰り返しています。ヨハネ 14 : 20 に「わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおる」とあります。何を言っているのかはっきり見る必要があります。「わたしが父におり」、つまりイエス様が父なる神様にいる、これは父なる神様とイエス様が一つだということです。「あなたがたがわたしにおり」というのはこの弟子たちがイエス様のうちにいるということです。そして「わたしがあなたがたにおる」というのは、イエス様があなたがたのうちにいる、神である主があなたのうちにおられるということです。20 節でこうお話になった後、23 節では「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」と言っています。つまりクリスチャンというのは、父なる神がイエス様を愛された、その愛をいただいた者たちだということです。そのようにみことばは教えてくれます。しかも「わたしたち(父なる神とイエス様ご自身)はその人(弟子たち)のところに来て、その人とともに住みます」と。みことばは救いにあずかったあなたに対して、あなたのうちに聖霊が内住されている。イエス様もうちなる神もともにいることを明らかにしています。

またヨハネ 17 : 26 にも「あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」とあります。「あなた(父なる神)がわたし(イエス様)を愛してくださったその愛が彼ら(弟子たち)のうちにあり、「またわたし(イエス様)が彼ら(弟子たち)の中にいるためです」と。忘れてはならないのです。遠くにおられるのではない。あなたのうちに主がおられるのです。だからイエス様がそうであったように、私たちもこういった誘惑に対してただ白旗を揚げるのではなくて戦いなさいと言うのです。サタンの誘惑に対して反抗しなさいと言うのです。これまでのようにむざむざと誘惑に負けてはいけない、既に与えられている主の力によって抵抗しなさいと。

5. 結果 : 「そうすれば」 : 「悪魔は逃げ去ります」

ヤコブは続けてこう言います。「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、」と、このような接続詞がついています。結果を表すのです。もしそうするならば、「悪魔はあなたがたから逃げ去ります」と書いてあります。ちょうどイエス様が「引き下がれ、サタン。」と言った時にサタンは「イエスを離れて行」ったと。勝ち目がなからずです。どうやってサタンが神であるイエスに勝利します? あらゆる手を尽くしたけれども、彼は敗北者としてその場を去っていくのです。その勝利者なる神があなたのうちにいてくださる、私のうちにいてくださる。私たちが学ぶべきことはどんな時で

も神のみことばを疑わないことです。私たちは自分勝手に解釈してはならない。みことばの真理をしつかりと学んで、そしてその真理にしつかりと立つことです。みことばを信じてそれに従うこと、その時に私たちはこのサタンの誘惑に勝利できると言うのです。

6. 従順

従順に関してに少し補足したいと思います。神があなたや私に求められる従順は、形式的な従順でないことは明らかです。形だけの従順を神は求めておられないことは言うまでもありません。ということは、問題なのはどんな動機で従おうとするかです。この話をよく見てください。ペテロはイエス・キリストを3度「知らない」と言った。そしてイエス・キリストが十字架で死に、三日後によみがえり、その後ペテロの前に現れました。イエス様はあえてペテロに対して「あなたはわたしを愛しますか。」（ヨハネ21：16）と問われた。三回目に問われた時にペテロはすべてはもうあなたがご存じだという話をします。「私があなたを愛することを覚えておいてになります。」（21：17）と言います。その後、イエス様はペテロに「わたしの羊を飼いなさい。」と務めを与え、そしてその後、「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」と言われます。何の話かという、「これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現わすかを示して、言われたことであった。」という説明がここには入っています。「あなたの行きたくない所に連れて行きます」とペテロの死に方を語った後、ヨハネ21：19で「わたしに従いなさい。」とイエス様はペテロに言います。流れはどうなっているかという、あなたはわたしを愛するかと問われた後、イエス様はペテロに務めを与え、そしてあなたは私のために殉教し、どういう死に方をするかお話になり、そしてその後、イエス様はペテロに「わたしに従いなさい」と言われたのです。

従順と愛についてイエス様は語っておられます。従順というのは神への愛の証明であると。神様のことを心から愛していたら、私たちはその方が喜ばれることをしたいはずで。神様が何を喜ばれるか皆さんご存じでしょう？神に従うことです。ひょっとしたら私たちはこう思うかもしれませんが。きっと神様がお喜びになるのは教会でいろいろな奉仕をすること、もちろんそうです。それぞれひとりひとり信仰者に与えられている賜物を用いて主に、教会に仕えることは神がお喜びになることです。でも私たちは自分の中で神がきっとお喜びになるであろうというクリスチャン像を作ってしまう。自分で勝手に定義を作るのです。その定義に基づけば神が喜ばれる信仰者というのは、教会の礼拝であったり、集会に熱心に参加している人、そう思うかもしれない。またある人は熱心に教会でいろいろな奉仕をしている人と言うかもしれない。問題なのは、神がそう言われているかです。もちろん今言ったことが間違っているのではないし、悪いことだと言っているわけではありません。でも神が一体あなたに何を期待しておられるかご存じですか？神があなたに期待していることはあなたが自分の賜物を用いて神様に一生懸命仕えていくこと、もちろんそうです。でもそれ以上に神があなたに期待していることは、あなたが主イエス・キリストに似た者に成長することです。あなたが信仰にあずかった時に、その働きを助けるために、聖霊なる神が我々ひとりひとりのうちに与えられました。神が期待していることはあなたがどれだけの知識を蓄えるかとか、あなたがどれだけの奉仕をするかとか、どれだけ有名な者になるかとか、もちろんそれも大切ですが、もっと大切なのはあなたが日々イエス・キリストに似た者に変えられて行くことです。そしてあなたが日々イエス・キリストに似た者に変えられて行くためには、神のことばに従う以外に、あなたの信仰が成長することはあり得ないのです。

皆さんも信仰を持たれて、ある人は長い年数、ある人は短い年数がもう既にたったでしょう。年数の問題ではないのです。質の問題なのです。我々信仰者が覚えておかないといけないことは一体何のために神が私たちを救ってくださったのか。神があなたを救ってくださったのは、ただ地獄からあなたを救い出すためではないのです。それは結果です。神があなたを罪から救い出し、永遠の地獄から救い出してくださいましたのは、あなたがイエス・キリストに似た者に日々変えられることによって、あなたを通してこの神の栄光が現され、あなたを通してこの神のすばらしさが世に明らかにされていくためです。信仰者であるあなたはそれを忘れてはいけません。ただ何となくクリスチャンとしてのゲームを楽しんでいるのではダメなのです。何となく教会に集まって来て、何となくここで交わって楽しい時間を過ごして帰る。そんなためにイエス様があなたを救ったのではないのです。イエス様はあなたがイエス様に似た者になるために必要なものすべてを下された。だから私たちに必要なのはこの神のみことばに従うことです。神の導きに従うことです。私たちの祈りというのは、主よ、どうかあなたに似た者に私を変えて行ってください。そのためにあなたは私を救ってくださった。あなたのすばらしさを世に証するために私たちを救ってくださった。どうかそのために私を用いてください。そう祈りながら歩んでお

られますか？何となくその日その日を過ごしていませんか？罪の誘惑に対して私たちはもう最初からあきらめてしまっている。そのような信仰の歩みを喜ぶのはサタンだけです。みことばは私たちにどう生きるかを教えてくれます。みこころは何かを教えてくれるのです。我々ひとりひとりが覚えなければいけないのは、私はイエス・キリストの恵みによって救われてから、本当にイエス・キリストに似た者に変えられているのかです。私の考えることがイエス様の考えることと一致しているのかどうかです。私のことばや行いがイエス様に喜ばれ、イエス様が歩まれたように歩んでいるのかどうかです。

もし私たちが神の命令に従っていなければ罪を犯しているのです。みことばには年齢的な条件はついていません。健康とか健康でないとかそんな条件はついていません。神が言われたのは神に従いなさい、私のみことばに従いなさい。そして悪魔に立ち向かえと。その時に悪魔はあなたがたから逃げ去り、勝利できるのです。神のみことばに、神に従うことの大切さをみことばは確かに私たちに教えてくれます。

B. 「神の助けを求め続けること」

二つ目は、神の助けを求め続けることです。私はイエス様を信じてこの救いにあずかった時にこんなことを考えました。もうこれで私は罪を犯すことがない、完全にきよい人に変えられたのだと。ところがそれが間違っているということがすぐに明らかになりました。同じ罪を犯すからです。パウロが確かに苦しんでいる様子を記してくれています。「私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」（ローマ7：15）、「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。……私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」（ローマ7：19-21）と。パウロ自身も悩んだのです。自分の心の中には神に喜ばれることをしたいという思いを持っていながら、私のやっていることはそれと真逆のことだと。

どうして神は我々から誘惑を取り除かれられないのかと思いませんか？もし誘惑さえなければ罪に苦しむことはないのです。なぜ神様は救いとともにもそれを私たちから遠ざけてくださらなかったのか、無縁のものにしてくださいなかったのか——。またどうして神は我々を誘惑に負けない者としてくださらなかったのか、なぜ私たちはこうして敗北を喫し続けるのでしょうか？もし誘惑に負けることのない者と変えられていたら神を悲しませることがなかった。なぜ救われた後、私たちはこうして日々罪との葛藤を経験し続けるのでしょうか。なぜ神はこの誘惑を完全に取り去ってくださらないのでしょうか。そんなことを考えたことはありませんか？聖書は答えをくれています。実は取り去らないことが神のみこころだからです。なぜかという、私たちには学ぶべきレッスンがあるのです。主に頼るということを学ぶレッスンです。なぜこのレッスンが必要かという、主に頼ることによってのみ罪に勝利することができるからです。

救いについて少し考えてみてください。神ののろいのもとにあったあなたが、罪のさばきのもとにあったあなたがそこから解放された。この救いにあずかるには100%神の助けが必要でした。神が何をされたのか思い出してください。救い主を送ってください、あなたに救いが必要であることを悟らせてください、あなたを神のもとに召してください、あなたが心からイエス様を信じて自分の罪を悔い改めてイエスが私の主であると告白して、そして生まれ変わる。このすべてのみわざを神ご自身がしてください。だから恵みなのです。どうして救いにあずかった私たちがその時点から神の助けを必要としなくなったのでしょうか？罪の力やこの束縛に勝利するために私たちには神の助けが必要なのです。ですから我々の信仰生活において、神の助けが必要であることを確信するための学びが継続しているのです。そのことを学び続けているのです。なぜかという、我々はなかなかそのことを学ばないからです。

イスラエルのことを思い出してください。彼らは神に逆らい罪を犯した時に懲らしめを経験しました。そうして彼らは神の前に悔い改め、その時に赦しがあった。しばらく正しく歩んでいるのですが、問題がなくなると、彼らは再び罪に陥っていきます。そしてまた彼らは悔い改める。同じことを繰り返しています。私たちも同じです。イスラエルの民がエジプトを出てきて、カデシュ・バルネアまでやって来ました。大体エルサレムからだと200キロ、死海の南部からだと大体100キロぐらい南西に行ったところにあります。人々は「さあ、神が与えてくださったこの土地に私たちは攻め入って、私たちのものにするのだ」と言うのです。神が下さった土地なのだと。そのメッセージを聞いた時に、彼らは、ちょっと待ってください、どんなところか見に行ってみましょうよと言うのです。それを聞いたモーセは、まあいい考えだということで12人の斥候、スパイを送りました。彼らが戻って来た時にはその地の果物を持ってきて、私たちの神、主が私たちに与えようとしておられる地はよい地ですと言いま

した。そう言っているが、彼らは上っていき、そこに攻め入れようとはしなかった。そして「あなたがたの神、主の命令に逆らった。」と申命記 1 : 26 に記されています。

彼らはなぜ行かなかったのか理由があるのです。彼らは天幕の中でつぶやいているのです。主は私たちが憎んでおられるから、こんな厄介なところに私たちを導き入れたのだと。神は我々を滅ぼそうとしておられるのだと。なぜかと言うと、行ってみたら、そこにはすごい巨人たちがいた。大きくて背の高い連中がいて、町々は大きく、城壁は高く天にそびえていると。そこで「アナク人を見た」と斥候たちが言うものですから、人々も心がくじけてしまうのです。「アナク人」というのは民数記 13 : 33 を見ると、「ネフィリム」という巨人の一族の子孫に当たり、非常に大きかった。

さあそうやって斥候たちの話を聞いたイスラエルの民は、私たちは攻め入ることができない、無理だと、心がくじけてしまう。その民に対してモーセはこう言うのです。申命記 1 : 29-31 「私はあなたがたに言った。『おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。』あなたがたに先立って行かれるあなたがたの神、主が、エジプトにおいて、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにしてくださったそのとおりに、あなたがたのために戦われるのだ。また、荒野では、あなたがたがこの所に来るまでの、全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ。」、つまりあなたたちは見てきたでしょう、エジプトの地で神がどんなみわざをなされたのか。そしてエジプトを出てこの約束の地に来るまでの間、神がちょうど子どもを養うように私たちのことを守ってくれたのを見て来たでしょう。そしてモーセは彼らに対して「このようなことによってもまだ、あなたがたはあなたがたの神、主を信じていない。」と言うのです。この「信じ」るといふことは信頼していないと。どんな奇跡を見ても、どんな神のわざを見ても、人々は信頼し続けるかということ、なかなかそうはいかない。あのイスラエルでもそうだったのです。

そして今度神は、では「向きを変えて、なぜならもうあなたたちはその約束の地に入らないと。そのことを聞いた時に彼らは我々は「主に向かって罪を犯した。私たちの神、主が命じられたとおりに、私たちは上って行って、戦おう。」（申命 1 : 41）と言って出て行くのです。自分たちが神の前に罪を犯したことに気づいたからです。その後主はモーセに「上ってはならない。戦ってはならない。わたしがあなたがたのうちにはいないからだ。」というメッセージを伝えなさいと言います。上っていきこうとするイスラエルの民に神が命じたのはわたしは「あなたがたのうちにはいない」と。ご存じのようにその後彼らは敗北を喫するのです。

1. 彼らは、神に信頼をおいて歩むことを常に学ぶことが必要だった

神に信頼を置いて生きること、これは私たちが頭で理解して納得する話ではないのです。そのように生きることです。そして神はそのことをあなたに教えるためにいろいろな機会を与えてくださっているのです。私たちが神に信頼するために必要なことは、自分の弱さ、愚かさに気づくことです。同じ申命記 8 : 2 でみことばがこう教えます。「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」と。神はイスラエルの民に対して、あなたたちはいろいろな苦しみを経験し、いろいろな試みを経験した。それはあなたたちがわたしの「命令を守るかどうか」を知るためだと。「心のうちにあるものを知るため」だと。いろいろな試練を通して神がこのイスラエルの民が何を考えているのか、心のうちにあるものを知ろうとしたのではないのです。神はそんなことをしなくても、彼らの心のうちにあるものを既にご存じです。では何を言っているのかというと、このイスラエルの民が自分の心を正しく知るためです。どんな偉そうなことを言っているか心はどうなのか、自分を知らないといけないのです。私たちは立派なことを言えるのです。問題は私たちの心です。みことばが私たちに教えてくれていることは、神はいろいろな機会を使ってイスラエルの人々ひとりひとりにそれぞれの心がどのようなものかを明らかにしたのです。こんなに不従順だから、こんなに不信仰だから神の助けがなければ従順に歩めないことを悟ることによって初めて人間は「神様、助けて」と言うのです。

私たちに必要なのは、人と自分を比較して自分の方が優れているとか、自分の方が信仰において勝っているとか、そんな人間的な下らないことはやめることです。我々に必要なのはしっかりと神を見上げるだけではない。神の目を持って自分を見ることです。全知の神が、私の心をごらんになっている神が、どんなふうに私をごらんになっているのか——。言い方を変えれば、神の目に自分はどんなふうに映っているのかです。その時に初めて私たちは自分の愚かさ、弱さに気づいていきます。私たちに必要なことは自分でできるとか、自分で頑張ったら何でもできる、そういった人間的なプライドを捨て去ることが必要です。だから信仰生活において学ばなければいけないことは、信頼できない自分に信頼する

ことをやめて、信頼できる唯一のお方に信頼を置くことです。そのためには自分のプライドが砕かれていくことが必要です。

2. 主の前でへりくだりなさい

先ほど見たヤコブ4：10には「主の御前でへりくだりなさい。」とあります。ここで彼が言ったことは今お話ししたことです。「主の御前で」、神の前に謙虚になっていくには、あなたは神がどんなお方かを知ることです。そして先ほど言ったように、神の前に自分がどれほど罪深い存在かを知ることです。私たちは神様、あなたに従いますと言っても、すぐに失敗する者です。神様、私のことばがあなたによってきよめられて、あなたが喜ばれることばをいつも発することができますように祈っても、言わなくていいことを言うわけです。言うべきことを正しい言い方でない言い方で言うわけです。ことばで失敗することがいつまでたってもやみません。私たちの心の中には神に見てもらいたくない。だから人と自分を比較するのではなくて、神の前に私がどのように映っているのか、神は私をどんなふうにごらんになっているのかを見た時に、一体我々の何を自慢しようとするのでしょうか。一体何が自慢できるのでしょうか。本当の自分の姿に気づいた時に、神様に従うと言っても従えない。神が喜ばれることをしたいと言ってもできていない。神に忠実でありたいと言ってもそうでない私たち。我々がそのことに気づいた時言うのは「主よ、助けてください」です。あなたの助けがなければどうすることもできないと。こんなに心の中ではあなたに従いたいという願いを持っていながらそのように生きていけない。ことばで人々を励まして人々の信仰が成長するようにそんなことばを発していきたくないと願っていながら、そうでないことばを発している。助けてください神様と。

3. 結果：「そうすれば」：「高くして下さいます」

本当の自分に気づくまで、私たちは神の前に助けを求めようとはしないのです。私たちは神の前に助けを求めようとはしないのです。見てください、ヤコブ4：10に「主の御前でへりくだりなさい。」その後接続詞がついています。「そうすれば」、結果です。「主があなたがたを高くして下さいます。」と。この「高くして下さいます」というのは品とか位とか幸福度を高めるということです。つまりそういう人を神が祝されるということです。神の前で本当の自分を見て、そしてへりくだっている者たち。神はそういう人を祝されるのだと。あなたは自分の知恵や力、経験に頼って生きていませんか？我々信仰者の生き方というのは、主よ、あなたはみことばを通してみこころを教えてください。そのように生きていきたくないと私は願っています。でもその行いにはあなたの助けがなければだめです。私たちがみことばを学ぶ時も神様、あなたの助けがなければあなたの真理を知ることができない。こうして神は忍耐を持って私たちが本当の自分に気づいていくように、本当の自分を少しでも鮮明に見るように働いて下さった。そのために苦しみが必要だったり、そのために心が安らぐためには必要だった。我々の生活においてもどうして罪の誘惑があるのか——。私たちはそのような誘惑に自分の力で打ち克つことの出来ない、弱い存在だということを我々が心から悟るためにです。その時に私たちは神に対して助けを求めていきます。かつて私たちが学んだみことばの中にガラテヤ5：16「御霊によって歩みなさい。」というのがあります。「歩みなさい」というのはそのように生きて行きなさい、そのように行動しなさい、聖霊によって継続して生きて行きなさい、暮らして行きなさいと。

パウロは、クリスチャンである私たちは罪の誘惑、この肉の欲望を満足させようという誘惑に勝利するためには聖霊なる神様の助けが不可欠であると教えていました。御霊によって歩め、我々の信仰の歩みにおいて必要なのは神の助けなのです。その後また接続詞がついています。どんな接続詞かというと、「そうすれば」、結果です。「そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と。「欲望」、悪い意味で使われています。神のみこころに従うのではなくて、自分の思いどおりに生きていくように、神を喜ばせるのではなくて、自分を喜ばせるように、快樂のままに生きて自分を満足させなさい、そういった生き方です。そういうことを「満足させるようなこと」はないというのは、肉がしたいと願っていることを成し遂げさせないということです。私たちの肉は神に逆らって、自分の快樂のままに生きるようにと働こうとするのです。でもその願いを達成させないと言うのです。どうすればいいかというと、聖霊の助けをいただきながら生きることです。神の助けをいただきながら生きるならば、肉が私たちを支配して、肉の思いのままに神のみこころに反する生き方をしようとする私たちのうちに働くのですが、その願いを成就させないと。しかもここに否定語が二つ並んでいました。絶対にあり得ないという意味です。肉が成し遂げようとする罪の願いを絶対に、絶対に成し遂げさせないと。そんな約束をみことばは私たちに与えてくれるのです。つまり確かに誘惑はあるのです。しかし、その誘惑の中にあって私たちは勝利できるのです。その鍵は神の助けをいただき続けることです。

イスラエルの民を見た時に、彼らは失敗した時に謙虚になって神に助けを求めました。でも問題がないと段々その謙虚さがなくなってしまって、神の助けがなくなっちゃってやっけて行けると思った時に失敗しました。我々の生活もそうではありませんか？ 私たちに必要なのは常に神の前に助けを求めることです。ですから聖霊によって歩んでいる人は、その心が神によって支配されているので、罪が支配しようと働き始めた時にそれをストップさせるのです。きょう学んできたように、サタンに対して彼の好き勝手にさせないのです。そういった生活が我々信仰者には可能なのです。主が我々のうちにいてくださるからです。ですから罪に勝利するためには神の助けを仰ぎ続けることが必要だ、そのことにお気づきになったはずです。そしてそういうふうには我々が生きて行くなれば、神の栄光を現すのです。

イスラエルの南王国ユダの王が亡くなった後、彼の息子のアサが彼に代わって王となりました。彼は41年間治めます。すばらしい王様だったと聖書が教えます。ユダから偶像を除いていくのです。10年間平和が続いたことが書かれています。その時にある敵がやって来ます。「クシュ人ゼラフ」と書いてあります。この話はⅡ歴代誌14：1から書かれています。アサにはすばらしい軍隊がありました。8節「大盾と槍を帯びる軍勢が三十万、ベニヤミンの、盾を持ち、弓を引く者が二十八万」人と、具体的に数まで書いてくれています。「すべてが勇士であった」と。つまりユダのサイドには58万人の兵士がいたのです。精鋭たちです。そこに先ほどお話したクシュ人のゼラフが100万の軍勢で戦いを挑むのです。約2倍近い軍勢で彼らは攻めてくるのです。300の「戦車を率いて」と書いてあります。まさに戦いが始まろうとした時に、この王であったアサは「その神、主に叫び求めて言った」、祈っているのです。「主よ。力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。私たちの神、主よ。私たちを助けてください。私たちはあなたに頼り頼み、御名によってこの大軍に当たります。主よ。あなたは私たちの神です。人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」(11節)と。アサは自分たちの力でこの敵に立ち向かおうとしたのではなかったのです。神に助けを求めました。12節には「主はアサの前とユダの前に、クシュ人を打ち破られたので、クシュ人は逃げ去った。」と書いてあります。アサの軍隊は確かにすばらしかったでしょう。でも彼らが打ち破ったのではないのです。この敵を打ち破ったのは神です。こんな全能の神に頼って生きることがあなたにはできるのです。でも悲しいことにあなたはそんな神よりも自分の力に頼ろうとしている。そんな人のことをみことばはエレミヤ17：5-6で「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。」と言っています。「人間に信頼し、肉を自分の腕」とする、つまり人間を自分の力としている人です。神ではなく人間に頼っている人のことです。そんな人は「のろわれよ」と。「そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。」、つまりその人には祝福は訪れないと。主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるようにと。

この地上にあって我々信仰者が歩んで行く時に、何が必要かという、この方の助けをいただきながら歩み続けることです。私たちは24時間365日、常に神の助けが必要です。そうでなければ神に喜ばれることが私たちにはできないのです。そして感謝なことに神はその助けをあなたや私に与えてくれるのです。信仰者の皆さん、罪に勝利した者として生きるためには神のルールに沿って生きなければいけないのです。あなたは神の助けを常に求めながら歩んでおられますか？ それとも自分の知恵とか力とか経験とかどうでもいいことに頼っていませんか？ もしそうだとしたら、だからあなたは敗北に敗北を喫するのです。もっと言えば、だからあなたは神の栄光を現すことができないのです。イエス様はそんな方ではなかった。あのサタンに対しても、敢然と勝利をなさったのです。どうすれば罪に勝利した者として生きることができるのかを教えてください。この生き方は、あなたに対する神様からのメッセージです。主のことばを信じることです。主が教えてください。主が教えるように歩んで行くことです。その時に私たちは主のみわざを期待することができます。そんな人生をあなたは生きられるのです。神の偉大さを示す人生です。神の栄光を現す人生です。なぜならその人生こそがあなたを主イエス・キリストに似た者に変えていく人生だからです。どうか何のためにあなたが救われたのか、神があなたに期何を待たせておられるのか、そしてどうすればその目的を果たすことができるのか、神のことばをしっかりと覚えてそのおことばに神の助けをもらいながら実践してください。そうやって生きて行きましょう。